

バーチャル日本人家庭訪問プロジェクトの試み — ベルギーにおけるオンラインの体験型学習活動 —

ゲント大学 小熊利江

1. はじめに

ベルギーにある筆者の所属大学の日本学専攻では、学生の多くが3年次後期に日本に留学することになっている¹。しかしコロナ禍のため2020年春から予定されていた留学が中止になり、3年生は留学しないまま卒業した。日本からの留学生も当地に渡航できず、本学の所在地には日本語母語話者（以下、「日本人」とする）がほとんど住んでいないため、生の日本語に接する機会が限られた。この年の卒業生は、日本語の運用能力が例年より低いレベルにとどまり、修士課程に進学した際に日本語運用能力をどのように高められるかが課題となった。

言語能力の習得には意味交渉を伴うインターアクションが重要であると言われている（Ellis 2003, 小柳 2020, 他）。インターアクションには文脈が必要であり、学生が主体的に学べるタスクを用いた教室活動や教室外での体験型学習が効果的であるとされている。日本の大学では、留学生が地域の日本人家庭にホームステイやホームビジットをする教室外の交流プログラムが広く取り入れられているが、本学でも留学の機会を逃した学生のために、海外にいながら行える日本人との交流活動を取り入れたいと考えた。とはいえ当時、ベルギーはロックダウン（都市封鎖）下で自由に外出することが難しかった。その半面、国全体でテレワークが義務化されたため各家庭でのオンライン環境が整っていた。これらの状況を考慮し、ベルギーに在住する日本人家庭に協力を求め、オンラインにて家庭訪問活動を試みることにした。

世界中でコロナ禍のため2020年から突然、授業のオンライン化が始まったが、授業だけでなく体験型の学習活動もオンラインで行うことができるのだろうか。本稿では、ベルギーの大学にて導入されたバーチャル日本人家庭訪問プロジェクトの詳細を記述し、オンラインでの体験型学習の効果とその可能性を探る。

2. 先行研究

日本国内では近年、留学生が日本人家庭を訪問する活動が各地で行われ、その事例が多く報告されている。鹿浦（2009）では、大学の留学生支援活動としてホームビジット²・プログラムを提供していることを報告し、ホームビジットが留学生にとって言語使用の場として重要な働きをするだけでなく、日本人の生活を実体験して日本の文化や習慣を知る機会になると述べている。他にも同様に、家庭訪問活動が留学生の日本語や日本文化の学習の場となるという利点を挙げる報告が多く見られる。

一方、海外において日本人家庭訪問が行われているという報告もいくつか見られる。トムソン（1997）では、日本語を専攻するオーストラリアの大学生が現地在住の日本人家庭を訪問する活動が紹介されている。学生は事前に、訪問中の話題に関する知識を身につけ、訪問時のマナーを練習する。その後、学生は家庭と連絡をとり、訪問の一部をビデオに撮り、それを授業中に見て反省を行った上で補充問

題を行うという手順である。海外では日本人や日本的なものに接触する機会が少ないため、日本人家庭訪問は日本語を使用し日本文化を学習する貴重な場となる。ただトムソンの指摘するように、「世界に点在する日本人コミュニティ」は日本語学習の人的リソースであるが、「教師がリソース調達に全責任を負うのは大変なこと」である。大学など教育機関から留学生支援が受けられる日本の状況と異なり、海外では教師が受け入れ先の日本人家庭を見つける大変さのために、家庭訪問活動があまり取り入れられていないと考えられる。

小熊（2015）の研究では、ロシアの大学で日本語を専攻する学生を対象にした日本人家庭訪問プロジェクトについて報告されている。プロジェクトでは学生が訪問先で日本人家庭とディスカッションを行う課題が設定されている。事後に行われた学生へのアンケート調査をもとにプロジェクトの評価が行われており、それによると、プロジェクトの学習効果として日本人の生活面の知識が得られたという意見が多く、日本語を話す力も向上したと述べられていた。学生が難しいと感じた点として、退出する頃合いや手土産などの訪問のマナーに関することや、メールの書き方などが挙げられていた。

今回コロナ禍の状況で、実際に家庭訪問を行うことが困難であるため、本学ではオンラインにて疑似的に家庭訪問を行うことにした。オンラインでは実際の接触場面のコミュニケーションと異なると考えられ、画面上の疑似訪問では得られない体験もあることが予想される。本研究では、海外で実際に日本人家庭訪問が行われた小熊（2015）の事例と対照し、バーチャルな訪問でどのような学びの体験が可能か、また実際の家庭訪問とどのように異なるのかという点を中心に、学生と日本人家庭へのアンケート調査をもとに具体的に探ることとする。

3. 本研究の目的

本研究の目的は、以下の3点である。

- (1) オンラインで行われた日本人家庭訪問プロジェクトの実践方法について詳しく紹介する。
- (2) 海外で実際に行われた家庭訪問の事例とバーチャル家庭訪問とを対照して、どのような差異があるのかを示し、オンラインでの家庭訪問における学習の特徴を明らかにする。
- (3) オンラインで行う体験型学習の意義、および本活動の学習効果について明らかにする。

4. バーチャル日本人家庭訪問プロジェクトの概要

4.1 対象と時期

本学では、2021年の修士課程1年次の日本語コースに、体験型学習であるバーチャル日本人家庭訪問プロジェクトを導入した。

対象学生： 日本学を専攻する修士課程1年生 18人

日本語能力： 中級レベル（CEFR: B1-B2）

母語： オランダ語

期間： 2021年2月～5月のうち90分授業8回分

日本人家庭数： 9家庭

4.2 本プロジェクトワークの進め方

先行研究と同様に、本バーチャル家庭訪問プロジェクトでも日本人家庭とディスカッションを行う課題を設定した。日本学専攻のコースであることから、話題は日本に関連するものとした。本プロジェクトワークの進め方は、以下の通りである。

- (1) 学生が2人1組となり、各学生ペアが日本人とディスカッションを行うための話題を決めて、それについて調べる。
- (2) 各学生ペアは、話題について調べた内容を授業内に発表する。発表後に質疑応答と模擬ディスカッションを行う。
- (3) 各学生ペアは指定された日本人家庭にメールで連絡を取り、バーチャル訪問の約束をする。その上で、自分たちの使いやすいアプリを選びミーティングを設定する。
- (4) 各学生ペアは日本人家庭をバーチャル訪問して、自分たちの話題についてディスカッションを行う。
- (5) 各学生ペアは日本人とのディスカッションで学んだことについて授業内に発表を行う。発表会はオンラインで行い、日本人家庭を招待する。発表会では、学生の発表後に日本人家庭を交えて質疑応答や意見交換を行う。

各活動の時間配分に関して、活動(1)は授業外の課題とし、活動(2)には授業2回半の時間をあてた。活動(3)と(4)の期間は2021年3月上旬から約1か月と設定し、学生は授業外にて自身のペースで課題を進めた。活動(5)は、学期末の2021年5月に授業内で2回に分けて実施した。

この他の授業時間においては、日本語でのメールの書き方や発表の仕方、スピーチレベルやディスカッションの表現等の学習を行った。各学生ペアの選んだディスカッション話題は、「カルチャーショック(2ペア)」「日本人の日常の宗教」「ベルギーの日本料理」「高校でのストレス」「移民」「公共交通」「日本の行事」「贈り物」であった。学生にはプロジェクトワーク中に困ったことがあれば教師に相談するように伝え、日本人家庭からも問い合わせがあれば随時応じた。尚、学生の緊張感をできるだけ軽減し、また家庭にとっても形式的な振舞いではなく気楽な雰囲気を醸成できるようにするため、オンライン訪問中の記録は行わなかった。

4.3 プロジェクトに参加した日本人家庭

本プロジェクトはオンライン訪問であるため、訪問先はどこでも可能であったが、日本ではなくベルギー国内に住む日本人家庭を選んだ。その理由として、以下の3点が挙げられる。

- (a) 学生の居住地と時差がないため、訪問の都合をつけやすい。
- (b) 日本に関しては日本人家庭の方がよく知っているが、ベルギーに関しては学生の方がよく知っているため、両者の知識のバランスが均衡している。そのため会話において一方的な知識の流れにならず、対等な関係で話し合うことができると考えられる。
- (c) 地理的に遠いとはいえ実際に会うことができる距離であるため、プロジェクト終了後も継続的な交流が期待できる。

一方で、訪問先の日本人家庭に参加を依頼する際には、以下の点に留意した。尚、プロジェクトへの協力を依頼した9軒の日本人家庭は、全て参加を快諾した。

- ・日本を離れて長く経っておらず、最近の日本の事情を知っていること。
- ・ホストファミリーのような役割を期待したため、ベルギーに家族で住んでいること。

- ・複数の日本人の考え方や意見を聞くことができるように、学生とのディスカッションに日本人 2 人以上で参加できること。

5. 実際の家庭訪問とバーチャル家庭訪問の比較

ここでは、海外において実際に行われた日本人家庭訪問活動の実践研究である小熊（2015）と本実践とを対照して、海外で行われる実際の訪問とバーチャル訪問の場合の異同について検討を行う。

5.1 参加学生と日本人家庭訪問の状況

小熊（2015）と本実践について、参加した学生の日本語学習背景や家庭訪問の状況を表 1 にまとめた。表 1 を見ると、学生の日本語学習背景として②日本留学の状況、③日本人との接触状況、④日本語学習期間はほぼ同様である。

⑤各家庭訪問における日本人の参加人数に関しては、バーチャル訪問の方が実際の訪問より家族の参加人数が多い様子が見られる。バーチャル訪問では 2 人以上でディスカッションに参加するよう依頼していたが、9 軒のうち家族全員が参加した家庭が 5 軒、母子の参加が 2 軒、父子の参加が 1 軒、夫婦の参加が 1 軒であった。オンラインの利点として訪問時間帯の自由度が高いため家族が都合をつけやすかった可能性があり、またロックダウン下のため家族が自宅にいられたことも多数の参加に影響していると考えられる。

⑥訪問時間に関しては、実際に家庭を訪問した場合の方が学生の訪問時間が長いことがわかる。オンライン画面上で長時間のミーティングを行うのは疲労することが、バーチャル訪問で時間が短くなった原因の一つとして考えられる。また実際の訪問においては、訪問先ですぐにディスカッションを始めたのではなく、ディスカッションの前後に他の活動が行われたことも訪問時間が長い要因であると考えられる。例えば実際の訪問では、全ての家庭において学生にお茶や食事が提供されていたことがアンケート調査からわかっている。家庭というアットホームな空間で、学生がお菓子や食事を取り雑談しながらゆったりと時間を過ごした様子が推察される。

表 1； 参加学生と日本人家庭訪問の状況

	実際の訪問（小熊 2015）	バーチャル訪問
① 学生数・家庭数	学生 10 人・日本人家庭 5 軒	学生 18 人・日本人家庭 9 軒
② 日本留学の状況	留学できる人数が限られている (留学経験者 3 人)	留学が中止された (留学経験者 1 人)
③ 日本人との接触状況	市内在住の日本人との接触が少ない	市内在住の日本人が少ない
④ 日本語学習期間	約 3 年半	約 3 年半
⑤ 各家庭の参加人数	1-3 人	2-5 人 ³
⑥ 訪問時間	2-3 時間	30 分-1 時間 30 分

5.2 学生による活動の評価と学習内容

本プロジェクトワーク終了後に、学習のふり返りを兼ねて学生に対して小熊（2015）と同様のアンケート調査を行った。小熊（2015）の調査の回答数は8人、本調査の回答数は18人であった。

アンケートではまず、家庭訪問が楽しかったかどうかについて「とても楽しかった」「少し楽しかった」「あまり楽しくなかった」「全く楽しくなかった」の4段階の選択肢を用いて質問を行った。実際の訪問の場合の回答を図1、バーチャル訪問の場合を図2に示す。図1と図2を見ると、実際の訪問とバーチャル訪問とは同様の回答傾向になっており、両群とも全員「とても楽しかった」と「少し楽しかった」という肯定的な回答であった。

その理由について自由記述において、実際の訪問では主に「日本人の生活を知る」(25%)、「面白い話を聞く」(25%)、「料理を食べる」(13%)などと記されていた。一方、バーチャル訪問では「日本人と話す」(67%)、「日本の文化を知る」(11%)、「日本人の意見を聞く」(11%)などが楽しかったと記されていた。回答数が少ないため一般化することは難しいが、バーチャル訪問では言語面に関する指摘がより多いことがわかる。実際の訪問の場合は、滞在時間が長いと学生が受け取れる情報量も多く、また家庭という住空間からの情報の種類も多岐にわたったことが推察され、その結果として楽しかった理由も様々であったと考えられる。

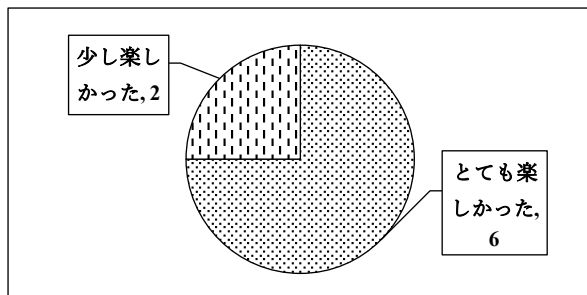


図1： 訪問は楽しかったか（実際の訪問）

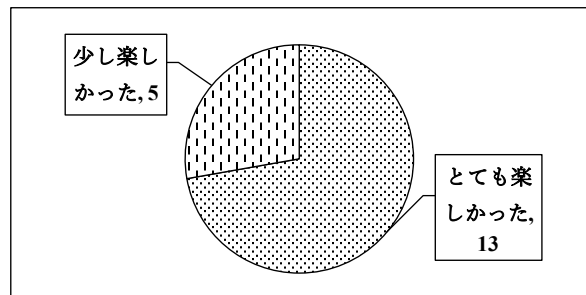


図2： 訪問は楽しかったか（バーチャル訪問）

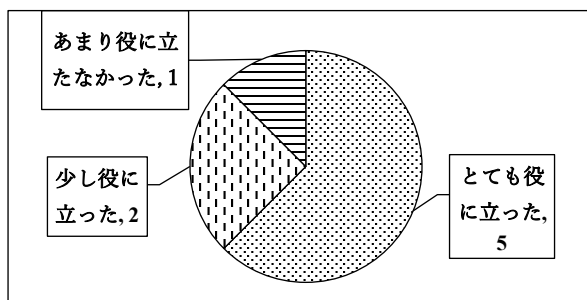


図3： 訪問は役に立ったか（実際の訪問）

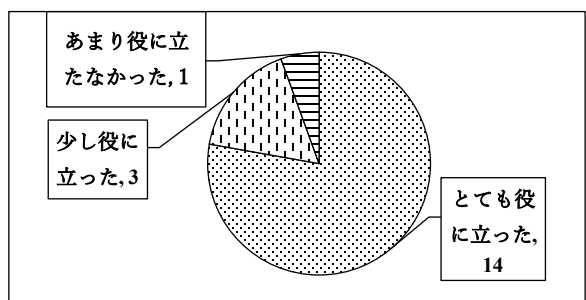


図4： 訪問は役に立ったか（バーチャル訪問）

次に、家庭訪問は日本語や日本文化の学習に役に立ったと思うか、同様に4段階の選択肢を用いて質問した。実際の訪問の場合の回答を図3、バーチャル訪問の場合を図4に示す。両者の回答傾向はほぼ同様で、どちらの場合においても「とても役に立った」「少し役に立った」という肯定的な意見が大半を占めた。バーチャル訪問の場合は学生が楽しみにしていた日本留学が中止になった直後の活動であったことが、役に立ったと感じる度合いの高さに影響している可能性がある。

役に立った内容についての自由記述において、実際の訪問の場合は「日本語を話す」(38%)、「日本

人の生活を知る」(25%)、「日本語を聞く」(13%)、「敬語」(13%)、「日本文化を知る」(13%)などと述べられていた。それに対して、バーチャル訪問の場合は「日本語を話す」(67%)、「日本語を聞く」(44%)、「メールを書く」(22%)、「敬語」(11%)、「自信がつく」(11%)などと述べられた。バーチャル訪問の場合は、日本語を「話す」「聞く」「書く」など主に言語技能の学習に役に立ったと認識した学生の割合が非常に多いことが明らかになった。バーチャル家庭訪問の場合、実際の訪問と異なり日本人の生活面の学習について触れた回答は見られなかった。これは、実際の訪問とバーチャル訪問との差異であると言える。

さらに、訪問の際に困ったことがあったかどうか、選択肢(複数回答可)と自由記述を用いて質問した結果について、実際の訪問の場合の回答を図5、バーチャル訪問の場合を図6に示す。図5と図6を見ると、実際の訪問の場合は困ったという回答自体があまり多くなかったが、バーチャル訪問の場合は困ったと回答した学生の割合が多かった。実際の訪問では、困った内容として言語面の他に日本についての知識や習慣の違い、手土産を何にするか、退出の頃合いなどについて記されていた。それに対してバーチャル訪問の場合は、困った内容が語彙力や聴解力など言語的な分野に偏る傾向が見られた。

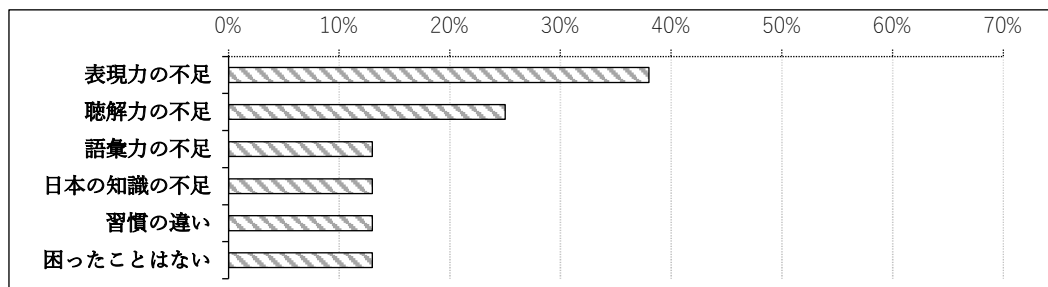


図5： 訪問の際に困ったこと (実際の訪問)

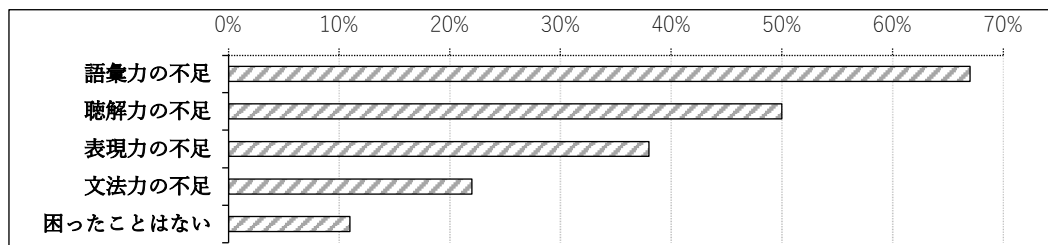


図6： 訪問の際に困ったこと (バーチャル訪問)

バーチャル訪問で、言語面の能力が不足していると認識した学生が多かった理由として、訪問先で他の活動を行うことが少なく、ひたすら会話を続けなければいけない状況であったため、会話がスムーズに運ばず困ったと感じる場面が多くなったのではないかと推察される。バーチャル訪問では、楽しかった理由も役に立った分野もほとんど日本語運用能力に関することであった。オンラインの接触では、他に入手できる情報が限られていることもあり、学生の意識が言語面に集中することが明らかになった。したがってオンラインの訪問活動は、実際の訪問より、学生が自身の言語能力の不足を認識する機会として有効である可能性がある。

言語学習における体験型活動は、学習者が文脈のあるインターアクションにおいて既習の文法や語彙などの言語知識を実際に使用し、相手からの反応を直に得ることに意義がある。反応を得ることで、自己の能力の確認と不足している能力の識別が可能になる。このような自らの能力を実感する体験に

よって、学習者は学習の必要性について気づき、新たな学習目標の設定につながることが期待される。気づきは言語習得の重要なプロセスであり、それによって言語習得が促進されると考えられる。

5.3 オンラインの体験型学習に特徴的な利点

バーチャル訪問と実際の訪問とでは学習内容に異なる点があることがわかったが、最後に、アンケートの回答からバーチャル訪問の方が良かったと述べられた点や有利に働いたと考えられる点についてまとめて述べる。これらは、オンラインでの体験型学習に特徴的な利点であると言えるかもしれない。

- ① 学生の労力軽減： バーチャル訪問では日本人が住む遠くの町まで出かけて行かずに済むため、学生の時間的および労力的な負担が軽減できるという利点がある。本アンケートにおいても、忙しいという理由で、実際の訪問はしたくないと記した学生が1人いた。
- ② 学生の心理的負荷軽減： 学生側の意見では「オンラインで会うのは簡単だ。実際に訪問するよりハードルが低い」「実際に訪問していたら、もっと緊張するだろう」など、バーチャル訪問によって心理的な負荷が軽減されたと指摘されていた。
- ③ 学生の利便性： 訪問がオンラインだったので、会話中にわからない単語を「辞書で調べることができました」と利便性を挙げる学生がいた。
- ④ 日本人家庭の心理的負荷軽減： 日本人家庭側にとっては、実際に学生の訪問を受けるよりオンラインで訪問される方が心理的な負担が軽いという意見があった。そのため、オンラインであれば比較的容易に家庭訪問の受け入れ先が見つかり、日本人の少ない海外においても持続可能な学習活動になるのではないだろうか。
- ⑤ 日本人家庭の利便性： 実際の訪問よりオンライン上での訪問の方が制約が少なく訪問可能な時間帯の幅が増えるのではないだろうか。その結果、より多くの家族の参加が実現する可能性が高まる。

今回、実際の訪問が不可能であったためオンラインで家庭訪問を行ったが、本実践研究の結果から、オンラインにおける体験型活動には、上記のような実際の体験型活動にはない利点が挙げられる。今後は、それぞれの活動の特徴を生かすことによって、オンラインでの体験型学習は言語学習の方法の選択肢の一つとなると考えられる。

6. おわりに

本研究では、海外で導入されたオンラインで行える体験型学習としてバーチャル日本人家庭訪問プロジェクトの実践概要を紹介した。その上で、学生と日本人家庭にアンケート調査を行い、海外で実際に行われた日本人家庭訪問の事例と比較してバーチャル家庭訪問の特徴を分析し、活動の学習効果を考察した。

その結果、実際の訪問とバーチャル訪問とも同様に、学生にとって日本人家庭訪問が楽しく役に立つ活動だと認識されたことがわかった。また、日本語使用に関しては、オンラインでも実際の訪問と同様の体験が可能であることが明らかになった。その一方で、バーチャル訪問は実際の訪問と異なる点があり、日本人の生活の様子や文化面の事柄など実際の訪問でなければ得難い学習内容があることが示された。実際の訪問の場合には、学生にとって役立つ内容がより幅広い分野に及んでいたが、バーチャル訪問の場合は、日本語の技能の習得に集中するという特徴があった。

またバーチャル訪問では、学生が自分の能力や知識が不足していると自覚した割合が多く、学生は本体験活動により日本語学習の必要性を認識したと考えられる。本活動はオンラインではあるが、日本人と生のインターアクションをするという経験を通して、学生は自分の日本語運用能力に不足しているものに気づき、新たな学習目標を設定するきっかけとなったと考えられる。この結果は、オンラインにおける体験型学習の可能性を示していると言える。

アンケート結果から、実際の訪問よりバーチャル訪問の方が、学生と日本人家庭の両者にとって心理的な負担が少ないことが認められた。バーチャル訪問であれば、場所を問わないため受け入れ家庭を見つけられる可能性が高くなる。日本人とのインターアクションが容易でない海外の日本語教育の現場でも、本活動は比較的取り入れやすいオンラインの体験型学習であると言えそうである。ただ、オンラインでの家庭訪問活動を導入する際には、言語的な分野のみに学生の意識が向く傾向があるという特徴など、オンラインでの体験型学習のメリットやデメリットについて考慮することが重要である。

注

- ¹ 本学の学部課程は、多くのヨーロッパの大学と同様に3年制であるため、3年次後期は卒業前の最終学期である。
- ² プログラムによって「家庭訪問」と「ホームビジット」という2種類の名称があるが、両者は同じ活動を指す。
- ³ 今回のバーチャル家庭訪問では各家庭に2人以上の参加を依頼していたが、1軒の家庭では小さい子どもと親が2人で参加しており、その家庭で実際にディスカッションをしたのは1人であった。

参考文献

- 植田栄子（1995）「海外日本人家庭で行うホームステイプログラムの有効性：タイにおける日本語学習者の場合」、『世界の日本語教育 日本語教育事情報告編』2号, 213-232. 国際交流基金.
- 小熊利江（2015）「モスクワでの日本人家庭訪問プロジェクトー海外の日本語教育における体験型学習の事例ー」、『BATJ Journal』16号, 19-26. 英国日本語教育学会.
- 小柳かおる（2020）『第二言語習得について日本語教師が知っておくべきこと』, くろしお出版.
- 鹿浦 佳子（2009）「ホームビジット・プログラム報告：留学生支援プログラムを考える」, 『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』19号, 53-61. 関西外国語大学.
- トムソン木下千尋（1997）「海外の日本語教育におけるリソースの活用」, 『世界の日本語教育』7号, 17-29. 国際交流基金.
- トムソン木下千尋・舩見蘇弘美（1999）「海外における日本語教育活動に参加する日本人協力者：その問題点と教師の役割」, 『世界の日本語教育』9号, 15-28. 国際交流基金.
- Ellis, R. (2003) *Task-Based Language Learning and Teaching*. Oxford: Oxford University Press.